

平成30年度秋田県総合政策審議会
第2回農林水産部会 議事要旨

1. 日時 平成30年7月17日(火) 午後2時～午後4時
2. 場所 総合庁舎6階608会議室
3. 出席者

【農林水産部会委員】

今野克久 (有限会社今野農園代表取締役)
佐々木 昭 (秋田県漁業士会会長)
佐藤 総栄 (有限会社秋田グリーンサービス代表取締役)
舘岡 美果子 (果夢園代表)

【部会長招致人】

佐藤 重信 (うご農業協同組合営農販売課販売担当係長)

【県】

小野正則 (農林水産部次長)
能見智人 (農林水産部参事(兼)農地整備課長)
齋藤正和 (農林水産部農林政策課長)
柴田 靖 (農林水産部農業経済課長)
河越博之 (農林水産部農業経済課販売戦略室長)
阿部喜孝 (農林水産部農山村振興課長)
本藤昌泰 (農林水産部水田総合利用課長)
渡部 謙 (農林水産部園芸振興課長)
畠山英男 (農林水産部畜産振興課長)
石井公人 (農林水産部水産漁港課長)
石山正喜 (農林水産部全国豊かな海づくり大会推進室長)
齋藤俊明 (農林水産部林業木材産業課長)
櫻田良弘 (農林水産部森林整備課長)
畠山欣也 (企画振興部総合政策課)
土門久仁子 (観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課)

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4. 部会長あいさつ

◎今野部会長

本日、秋田県の人口が前月から 913 人減少したと報道があったが、そういったことに対応できる何か提案ができればと思っている。引き続き委員の皆様より、御意見お願いしたい。

また、今回はうご農業協同組合から、佐藤様に出席いただいている。話題を提供していただき、意見交換の参考としていきたい。

5. 議事

◎今野部会長

議事を始める前に、一言申し添える。審議内容は議事録としてホームページに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要が無いと思うので、公開としたい。

それでは議事（1）について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料1により説明～

◎今野部会長

ただいまの事務局の説明について、第1回部会での皆様の御意見をまとめたものということで良いか。

～意見無し～

それでは、次に議事（2）「各論点に対する意見交換」について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料2、資料3により説明～

◎今野部会長

ただいま事務局から説明があった各テーマについて意見を伺いたい。

1つ目の「人口減少社会を見据えた多様な担い手・労働力の確保について」だが、次年度の取組に向けた視点を参考に、関連する取組や追加するべき取組などについて、発言をお願いしたい。

では、はじめに館岡委員からお願いしたい。

◎館岡委員

研修先を選ぶ際に、どういう所が受入可能で、どのような経営をしているのか分かるリストがあれば良いと思っている。市町村単位では、どの農家が受入可能なのか把握しているかもしれないが、全県版の受入リストがあれば、自分が希望する研修を選びやすくなると思う。また、法人であればホームページなどを作成しているところが多いので、自分で調べて連絡を取ることができるが、個人農家であれば、受入可能でも情報を得ることが難しい。秋田県出身であれば、希望する研修先を決めていることもあるが、場所を問わず、県内のどこでもよいから研修を受けたい人にとって必要なものだと思う。

◎今野部会長

ホームページを作成していない経営体もあり、自分で研修先を調べるには限界があるため、リストがあれば便利だと思う。

それでは次に佐藤委員に発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

林業では、林業企業ガイドブックや林業労働力確保支援センターなどがあり、知っている人はそこから情報を得て研修を受けたり、就職先を探しているが、県内の若い人は活用できていないと感じている。むしろ若い人の場合は、インターネットやテレビが林業に興味を持つきっかけとなっている。実際、弊社に入社を希望する方々は、ネットで調べたり、YouTubeで動画を見たという人が多い。また、県のPR動画に載せてもらうことも多く、その影響が大きいと感じており、メディアとして多くの人の目に触れる機会が増えるような取組をするべき。その際には、どのようなイメージで広告していくかということが大事である。林業に関係する映画が放映された時は、一時的に業界の雇用が伸びたので、イメージというのはすごく大事だと感じた。

◎今野委員

それでは、佐々木委員に発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

秋田県では、漁業というのはイメージしづらい。青森はマグロ、北海道は鮭やホタテなどイメージしやすいものがあるが、秋田県はそもそも漁業のイメージがないため、外部から漁業をしたいという人がいない。インターネットで発信している人が少ないため、秋田県の漁業は知られていないと思う。行政では、地魚のブランド化などに取り組んでいるが、ハタハタくらいしかイメージできないと思う。

◎今野部会長

ハタハタ以外に何があるのかと聞かれば、イメージしづらいところもある。

◎佐々木委員

いろいろ魚は捕れるが、ハタハタ以外に名産というものがない。

◎佐藤委員

経営は成り立っているのか。

◎佐々木委員

経営は厳しいところが多い。作業の効率化などを進めているところもあるが、海の資源そのものが増えない限り、誰かがたくさん獲ると、誰かが獲れなくなるので、販売単価を上げるか、資源を増やさないと、担い手は増えない。稚魚の放流に取り組んでもらっているが、魚が増えている実感はない。魚が増えれば担い手も増えると思う。

◎今野部会長

それでは、佐藤様に発言をお願いしたい。

◎佐藤氏

先日、先進地研修として愛知県に行き、農家に話を聞く機会があったが、労働力確保は愛知県でも最重要課題とのことだった。経営規模の大きい農家は海外に行き、自ら面接して、労働者を連れてくるとのことだった。うご農協では、同じ対応は難しいため、他にどのような対応をしているか聞いたところ、子育てが終わった女性を活用しているとのことだったので、秋田県でもそこに着目して、JAや行政と一体になったマッチングができれば労働力確保につながるのではないかと考えている。

経営の規模拡大により、作業の機械化が進んでいるが、子どもが手伝うことが少なくなり、農業に関わる機会が少なくなったと感じる。さらには農家の高齢化が進んでおり、若い人は農業をやらないというイメージがあると思うので、若い人も農業をやっているとPRするべき。

◎今野部会長

最後に私からも意見を述べさせていただくが、ビジネス感覚を持った経営者の育成という点では、農業法人協会や大潟村農家の若手会において、先輩農家の失敗談などを聞き、自分の経営に生かすことができるので、そういった体制づくりは必要だと感じている。また、若手会を運営しているなかで、働き盛りの若手である30～40代が、多忙により、勉強会に出席できないという状況にある。若い従業員を抱える法人においても、人手を減らしたくないため、勉強会に出したくないところもあるため、勉強会に出やすい環境を作るか、または人手や金銭的な補助が必要だと思っている。

新規就業者については、なかなか定着できない人もいるが、就業時に20～30年後にどういう将来を考えているのかを気にしながら育成できれば良いと思っている。独立したいのか、一社員として働き続けたいかなど、そういう部分に着目しながらサポートしていくことも大事だと感じている。

労働力確保の体制構築については、先日 J A大潟村で、外国人の雇用に関するアンケートがあった。J Aが主体となって農繁期に海外から作業員を雇用し、作業が終わればすぐに引き上げるというものだが、行政としても外国人の雇用について考えなければならないと思う。ある法人では、外国人を雇用する場合は、その人が帰国しても自立して農業ができるように指導することや、海外へ行って結婚式に出席してお祝いするなど、家族のような人間関係を築くことが必要であり、外国人でも当たり前の従業員として接しなければいけないし、そうでなければ外国人も働きたいと思わないだろうと感じた。

◎今野部会長

それでは二つ目の「ICTの先端技術の活用について」発言をお願いしたい。
では、佐藤委員に発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

現在、「木材クラウド」の開発を進めており、これは製材所と素材生産者の需給のマッチングを促すことや、情報を紙ベースでまとめていたものをデータベース化すること、さらにはデータ化したものをタブレットで現場から確認、入力できるものである。木材クラウド以外にも、ドライブレコーダーのGPSを流用し、現場で位置情報の管理ができるよう開発を進めている。事務所で現場作業員の位置情報が把握できたり、作業員相互で位置情報が確認できれば、個人の所有地に入ることを防いだり、作業の効率化につながると思っている。

また、農業ではパワーアシストスーツが開発されているが、林業でも同様に開発を進めてほしい。

◎今野部会長

木材クラウドはどこにどういう木が、どれくらいの量あるのかということ把握できるのか。

◎佐藤委員

自分の山の木がどういう状況にあって、いつ伐れる状態にあるのか全県レベルで把握できる。製材所はそれを確認し、問い合わせや注文をする。

◎今野部会長

では佐々木委員に発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

水揚げデータの集約とあるが、魚がたくさん獲れた場所に関しては、秘密にしておきたいというのが正直なところである。しかし全ての魚において、どの時期に海のどこに来るかが決まっているため、それらをデータ化すれば効率的に魚は獲れると思う。

◎今野部会長

漁業の経験が無い人でもデータ化したものがあれば魚が獲れるのか。

◎佐々木委員

漁師は魚の移動パターンを把握しているため、魚が獲れる。データ化してしまえば、経験が無い人でも魚は獲れる。

◎今野部会長

誰でも獲れるというのはある意味で怖い部分もあるかもしれない。
それでは館岡委員に発言をお願いしたい。

◎館岡委員

梨は摘花作業のあるりんごと違い、咲いた花すべてに受粉作業しなければいけないなど、多くの時間を要する。このため、作業の機械化によって省力化できれば良いと思っている。しかし、人の目で確認しなければ分からない作業もあるので、機械化は難しいと感じている。

◎今野部会長

それでは、佐藤様に御発言をお願いしたい

◎佐藤氏

先端技術を活用して、地下水の位置が把握できれば良いと思っている。秋田県の冬期農業が盛んにならないのは、雪が原因だと思っており、羽後のメガ団地では県内で初めてのプール消雪に取り組んでいる。水は地下水を利用しており、冬期でも水は15℃あるため暖かく、降雪時は積もらずに雪が消えていた。現在は、二つ目のメガ団地整備に取り組んでおり、そこにおいてもプール消雪に取り組むため、井戸を掘っているが、10mほど掘っても出てこないことから、今回提案したところである。除雪機や燃料費用に係るコストの削減は大きいので、地下水が利用できれば秋田県の冬期農業は発展する。

また、ICTを活用した花き栽培について、福島県の取組を視察したが、その農家はトルコギキョウを栽培していた。システムが土の保水量を検知し、自動で必要な量の水を供給するものである。高品質ではないが、それなりの生産量が期待できるとのことだった。品質を重視していないことから、産地によって販売戦略やイメージがあるので、必ずしも導入できるわけではないが、面白いと思っている。

◎今野部会長

自動で水を供給するとなれば、他の作業をしながらトルコギキョウの栽培が可能となる。省力化という点では抜群の効果がある。

先日、Facebook の投稿を見たが、アメリカで雑草を自動で取る機械があった。AI がカメラに映る苗と雑草を区別しているのだが、今後、全く発想していなかった作業をする機械やシステムが開発されるだろうと思った。また、柔軟な発想を持つ子どもや学生などに ICT の活用について、意見を聞いてみても面白いと思う。

この他に、秋田県内で環境整備システムを取り入れてトマト栽培をしている農業法人がある。機械が自動で培養液を調整するため、作業はトマトの収穫のみとのことだが、ICT を活用した農業というのは、今後ますます必要になると感じている。

それでは、3 つ目「複合型生産構造への転換に向けた取組のパワーアップについて」の御発言をお願いしたい。まずは舘岡委員から御発言をお願いしたい。

◎舘岡委員

樹園地を継ぐ人がいない場合などにおいては、メガ団地に参加して共同で生産し、就農希望者を受け入れるサイクルができれば、樹園地を守ることができると思うので、そういうメリットがあれば、メガ団地に参加したいと思う。

◎今野部会長

次に佐藤委員に発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

弊社の周辺には 60ha ほどの農地があるが、沢部で条件が悪いほか、農家の高齢化が進んでいるため、農業法人を立ち上げて守っていかなければならないと思っている。その中で、農地の利用法について、現在の規制をもう少し柔軟にしていれば、林業との複合的な取組も可能だと考えている。

◎今野部会長

それでは佐藤様に発言をお願いしたい。

◎佐藤氏

ハウスの建設や機械の導入に対する生産支援事業が多く、販売を支援する事業が少ないため、新たに事業を創設してほしい。作れば売れるかといえば、そう甘くはないというのが現場の声であり、生産支援と同じだけ販売支援も必要である。

また、農家収益を向上させるには、安く売らない工夫も必要だと感じている。「ひばり野オクラ」のように GI 登録を目指すなど、他の製品と差別化する戦略を強化するべきである。

それから、秋田県民が秋田県のもの知らないと感じるため、秋田県民に秋田のもの良さを伝えて欲しい。また、えだまめ、ねぎ、しいたけが秋田県のどこで食べら

れるのかと聞かれた時に答えられない人が多いと思っているため、もっと秋田に食材をおろすべきである。現在、県産物の多くは首都圏や関西に出荷されているが、地元で消費する分の枠を設け、県産物を知る機会を増やして欲しい。その取組の一つとして、ブラウブリッツやハピネッツのスポーツイベントで県産物を食べてもらう機会を設けているが、そういったイベントでの食材費や旅費などを支援してほしい。

◎今野部会長

最後に私から意見を述べるが、輸出に関する取組が少ないと感じる。県としてどういう考えを持っているか気になる場所である。海外の輸出促進イベントが却って足かせになるという他県の事例もあったため、取組については注意が必要である。個人的には秋田県産米として売るよりも、会社の名前を前面にした方が海外では売れるのではないかと考えている。国内への出荷を主としている農家にとっては、出荷量が溢れたときに、輸出へシフトするというのは避けて通れないと思っている。このため、輸出の部分についても何らかの取組があれば良い。

それでは最後に「中山間地域対策について」の御発言をお願いしたい。
まずは佐々木委員から御発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

鳥海山に木の苗を植える活動があるが、苗を植えるとうさぎの被害があるため、ネットを張って対応している。漁師はネット張りが上手いため、指導している。

◎今野部会長

次に館岡委員から発言をお願いしたい。

◎館岡委員

自己復旧が難しいくらいに荒れている農地を所有しているが、安値では売りにくいという人がいるため、問題になっているところもある。また、それを復旧して、営農してくれるような若い人がいないという状況でもある。

◎今野部会長

そういったところで梨は栽培できないのか。

◎館岡委員

山あいの地域は土壌の水分が多すぎるため、身崩れしやすい。

◎今野部会長

次に佐藤委員から発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

スギは沢部で日当たりの悪い所での成長が早いため、場所ごとに適した種類を植え
ていくなど対応できれば良いと思っている。

また、最近では山に散骨する人が増えてきている。跡継ぎがない家庭が今後多
くなってくるとすれば、中山間地域の新たな活用方法となるかもしれない。

◎今野部会長

次に佐藤様から発言をお願いしたい。

◎佐藤氏

秋田の天候を生かした品目を作付けするべきだと思っている。中山間地域の冷涼な
気候を適するものとして「ラナンキュラス」という花の栽培を進めてみてはどうか。
冬場に生育する品種なので、そういった適地適作を進めていくべきだと思っ
ている。

◎今野部会長

では最後に私から発言させていただく。中山間地域で取り組むべきことの
一つとして、やはり観光がメインになってくるのではないかと
思っている。アジアだけではなく、欧米諸国からも訪れてもらい、
地域に滞在し、良さを発信してもらうことで、また新たな観光客が訪れる
といったサイクルができれば良いと思う。

また、そもそも人がいないので、農福連携やひきこもりの方々が自立支援する場
として活用できないかと考えている。

それでは議題（3）その他 について事務局から説明をお願いする。

□事務局（農林政策課）

～他部局への調整が必要な意見の有無について確認～

◎今野部会長

これまでの意見交換の中で、他部局との調整が必要な事項はないと思うが
良いか。

～意見無し～

これにて、議事を終了する。進行を事務局にお返しする。

6. 閉会あいさつ

◎県 小野次長

本日は暑い中、貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。

今日は4つのテーマで意見交換していただいたが、担い手確保という観点からは、
若い人が将来設計を描けるようなイメージ戦略が大事だと感じた。

ICTの活用については、現在取り組まれているものもあるが、今後開発される技術を注視しつつ、新たな発想でどのような作業に活用できるのか考えていかなければならないと感じた。

複合型生産構造への転換に向けた取組については、現在の施策が生産支援に重きを置いている状況にあるが、今後は販売支援にも取り組んでいくべきという意見があった。

中山間地域対策については、雪や寒さなどの気候を活かした生産に取り組むことや、外国人観光客の受入に取り組むべきといった意見があった。

今回はこれらの意見をまとめ、次年度の取組に向けた提言案を示したいと思っているため、引き続き忌憚のない御意見をいただきたい。